
ラブレター

さら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブレター

【コード】

N98670

【作者名】

やじ

【あらすじ】

海沿いの田舎町に暮らす女子高生の凧は、姉の自殺を止められなかったことを、心の奥で密かに悔やんでいた。そんな彼女の前に現れたのは、東京から来たという自称小説家の男、潤一郎。どこか謎めいたこの男に、ひと目で惹かれてしまった凧だったが、やがて彼がこの町に来た本当の意味を知ることになり……切ない恋のお話です。

1 出会いと予感

沈みゆく夕日が、見慣れた海を茜色に染めている。波は静かに漂い、かすかな潮風が頬に当たる。空を舞う海鳥たちは、これからねぐらに向かうのだろうか……。

私はこの町が好きではなかった。

漁業と、新鮮な魚料理が目当ての、わずかな観光客によって支えられている、古くて陰気な町。

だけど私には、この町を出て行く勇気もないのだ。この町を出て、自分が変わってゆくのが怖かったのかもしれない。

防波堤に座って、ぼんやりと海鳥の数を数えていたら、私の後ろを一人の男がすうつと通り過ぎた。

釣り人も引き上げてしまった秋の夕暮れ。男はそのまま防波堤の先端まで歩いて、ただ静かに海を眺めていた。

観光客？ 私は思った。地元の間人でないことはすぐにわかる。彼は、魚臭さと田舎臭さが交じり合ったような、この町の若者とはあきらかに違っていた。

私はゆっくりと立ち上がる。制服のスカートの裾と、肩下まで伸びた栗色の髪が、少し強くなった海風にあおられる。

そして次の瞬間、私はその男に駆け寄っていた。

「何やってるの？」

私の言葉に男が振り向く。

身長百五十そこそこの私から見れば、その彼は見上げるように背が高く、カジュアルだけどきちんとした服装が、東京の大学生のようには思えた。

……いや、大学生とは少し違うかもしれない。彼から漂う雰囲気

は学生のように垢抜けてはなく、この町のどんよりとした風景のように、どことなく沈んで見えたから。

「何って……ただ海を見ているだけだよ？」

男はそう言ったが、私は無意識のうちに彼の服の袖をつかんでいた。

「飛び降りちやダメ」

私の言葉に彼が笑う。思ったよりも明るい笑顔だった。

「おかしなこと言うなあ、君。俺が自殺するとも思っているの？」

私は黙ってうなずいた。姉と最後に交わした電話の音が、なぜかじわじわと胸によみがえってくる。

彼は笑うのをやめて私を見た。私は泣き出しそうな顔をしていたかもしれない。自殺した姉を止められなかった悔しさが、今頃になって私の心を締め付ける。

「君、何ていう名前？」

彼が言う。柔らかくて優しい声。

「なぎ。杉浦凪」

「俺は秋山潤一郎。この先の、民宿街の裏にあるアパートに引っ越してきたんだ。池田荘っていうの。知ってる？」

「知ってる」

私は答えた。

「私の住んでる家のすぐ近くだから」

私が言うと彼はにっこり微笑んだ。無防備な子供のような笑顔だった。

「君のこと、なぜか他人とは思えないなあ。なんだかずっと前から知り合いのような気がする」

「……私も」

私たちは防波堤の上で、潮風に吹かれながら見つめあう。背の高い彼の向こうに、半分欠けた月が昇っていた。

この人と私はどこか似ている　私の中に初めて湧きあがってく

る想い。

それは今まで付き合った、この町の退屈な男たちとの恋愛だったとは違う、何かもつと深くて大切に愛しいもの。

彼と出会って何かが変わる。私はその時、漠然とそんな予感を抱えていた。

1 出会いと予感（後書き）

たくさん作品の中から、私の書いたお話を選んでいただき
どうもありがとうございます。

つたない文章ではありますが、心を込めて書いています。

もしよろしければ、お暇なときにでものぞいてやってください。
どうぞよろしくお願いいたします。

2 「向こう」から来たひと

「誰なの？ あの男」

魚料理が並んだ質素な夕食を前にして、母が不機嫌そうに目を細める。

私は何も答えなかった。男と歩いているだけですぐに噂になっってしまう、この狭い町が嫌だった。

「知らない顔ね？ あんた、観光客に手を出したんじゃないでしょうね？」

観光客に手を出す？ それはあなたでしょ？ そう思ったが口には出すのはやめておいた。

「池田荘に引越してきた人。東京から来たんだって」

「ふん」

母はそれだけ言っただけで煙草に火をつける。私は立ち上がり、姉の写真が飾られている小さな仏壇を横目で見てから、隣の部屋に入った。

六畳二間に小さな台所。漁港から、人とバイクしか通れないような狭い坂道を登った途中にある、古びた貸家。そこに私と母は住んでいた。五年前までは五歳年上の姉も住んでいた。

姉は部屋の壁に掛かった鏡の前で、長くて艶のある髪をとかしながら、「早くこの町を出たい」といつも言っていた。やがてその言葉通り姉は十八で町を出て、そして変わり果てた姿でまたこの家に戻ってきたのだ。

学校が終わると制服姿のまま、まっすぐ潤一郎の部屋に向かう。

木造アパート二階の彼の部屋からは海が見えた。私にとっては見飽きた風景だったが、東京から来た彼の目にはどう映っていたのだろうか。

大学生のようにも見えた彼は、自分のことを小説家と名乗った。

「読んだことないの？ この本」

彼はそう言つて、自分が書いたという一冊の本を差し出す。

「けっこう売れたんだよ？ ベストセラー」

私は知らなかった。そしてその本を夢中で読んだ。けれど、漫画くらいしか読んだことのなかった私には何だか難しくくて、結局何が言いたいのかわからなかった。

ただ、ラブロマンスを読んだ後のような、ふんわりと甘い気持ちになつて、なかなかいい感じではあった。

「小説を書くためにこの町に来たの？」

「まあ、そんなとこ」

「小説家つて、そうやって住むところをふらふら変えるものなの？」

「さあ、どうだろ？ でも俺は、ずっと東京で暮らしていたし、気がすんだらまた向こうに戻るよ」

潤一郎の言う「向こう」という場所。それは私にとって、とてつもなく遠い場所……。

「凧ちゃんは……」

潤一郎は私のことをこう呼ぶ。あまり「ちゃん」付けて呼ばれたことがなかった私は、少し……いや、かなり照れくさかった。

「高校卒業したらどうするの？ この町から出るつもりはないの？ 痛いところをつかれた気がした。出て行きたいのに出て行く勇気がないなんて、格好悪くて誰にも話したことがなかったけど、でも彼には正直に伝えようかと思つた。」

「つもりはあるんだけど……怖いの」

「どうして？」

潤一郎が私を見る。開け放した窓から海風が吹き込んで、彼の柔らかな髪を揺らす。

「東京に出て行った姉が亡くなったの。二年前に……自殺だったのよね」

彼は何も言わなかった。私は手持ち無沙汰な指を、肩のあたりで髪にくるくる絡めながら、重い口をゆっくりと開いた。

3 誰かのために

「お姉ちゃん……と言っても、私たち半分しか血のつながりはないんだけど」

潤一郎は窓枠にもたれるように座って、私の話を聞いていた。

「お姉ちゃんはいつもの町を出たがってた。そして高校を卒業してすぐ、望み通り東京へ出て行ったのに……いろいろあってね。結局疲れちゃったみたいで……」

「いろいろって？」

いつもの穏やかな口調で潤一郎が聞く。私はあまり話したくなかったが、あきらめて話し始めた。姉の噂は、この町の誰もが知っている話で、彼の耳に入るのも時間の問題だと思ったから。

「不倫してたの。最後のほうは奥さんがわざわざこの町までやってきて、うちに怒鳴り込んできたりして。すごかった。だけどその頃、お姉ちゃんとは連絡も取れなくてね。私も母もうんざりしたら、突然お姉ちゃんがあそこの防波堤から飛び降りたって連絡が来て……後からわかったんだけど、お姉ちゃん妊娠してたの。たぶん、その不倫相手の……」

私は一気にそこまで言って、小さくため息をついた。そしてこうつぶやく。

「だからかな……私もこの町を出たらそうやって堕ちてゆくような気がして……姉妹だからね。半分だけど」

「何で半分なの？」

また潤一郎が聞いた。もしかして小説のいいネタにされるかも、なんて一瞬思ったけれど、私は答えた。

「姉は母が結婚してた時できた子。幸せだったみたい、初めのうちは……でもだんだん夫婦仲が悪くなってきて、姉の父が浮気したのをきっかけに、母も見せつけに、働いていた民宿の客と浮気して、私ができちゃったの」

今度は潤一郎がため息をつく。

「本当に苦勞の多い一家だねえ」

私は苦笑いしてうなずいた。

「怒った姉の父は、めちやくちや母を殴って出て行ったんだって。お姉ちゃんが言った。あれほど恐ろしい光景はなかったって」

「その後、お母さんは君を産んだんだ」

「そう、どうしてかな。ただの行きずり相手の子供なのに……」

私は指に絡めていた髪をふわっと解く。

私の髪は生まれつき茶色がかっていて、毛先にくせがあった。そのせいで、先生から「染めてるだろう」とか「パーマをかけただろう」とか疑われてうんざりしている。中学の時は先輩に目をつけられて呼び出しされた。

母は真つ直ぐな黒髪だから、私の髪は父親ゆずりなのだろう。顔も名前も知らない私の父親の……。

遠くで子供たちのはしゃぎ声が響く。その声が遠ざかると、部屋の中は一瞬静寂に包まれて、やがて潤一郎の声が私の耳に聞こえた。「それでよかったんだよ、きっと。君は誰かのために生まれてきたんだ」

「誰かのために？」

「そうだよ。君を必要とする誰かのために。そして君のお姉さんも……」

潤一郎はそこまで言って言葉を切った。

窓の下を新聞配達バイクの音が通り過ぎる。部屋に夕日が差し込んで、海は茜色に染まっている。

「死ぬなんて、バカだよな。本当に……」

潤一郎の言葉が胸に響いた。深く、深く……姉の眠る、海の底まで届くかのように……。

忘れようとしていた姉の死が、手に取れそうなほど身近に感じた一瞬だった。

4 初めての気持ち

私の毎日は退屈だった。学校の授業はもちろん、幼稚園から代わり映えしない仲間と、一緒にいることさえ退屈だった。

だけど私は完璧な不良にもなりきれずに、なんとなく仲間と夜遊びをしてみたり、男と隣町の温泉つきのラブホテルに泊まってみたり、ただの田舎町の中途半端な不良だった。

でも、潤一郎と出会ってからの私は違う。

同じ年頃の、小さな癖まで知り尽くしているような幼なじみの男と比べ、彼はとても大人に見えだし、何と云っても私の知らない人生を歩んできたというところが魅力だった。それほどこの町では、友達も男も、誰もが身内のような仲でうんざりしていたのだ。

頬杖について、耳元の髪を指に絡ませ、教室の窓から外を眺める。高台に立つこの高校からも海が見えた。

彼も今ごろ、あの部屋の窓から、同じ色の海を見ているだろうか……。

呪文のように耳を通過する英語教師の声を聞きながら、私はそんなことばかり考えていた。

潤一郎が私のことを知りたがるように、私も彼のことを知りたがった。

「あの小説は初めて書いた作品なんだよ」

ふたりが初めて出会った、そして姉が飛び降りた因縁の防波堤に座って、潤一郎は海を見ながら教えてくれた。

入り江の波は今日も穏やかに凪いでいて、空では海鳥たちが、どこまでも自由に羽ばたいている。

「まさかあんなに売れちゃうとは思わなかったから、びっくりしたな」

「それから次の作品は書いたの？」

「まだ」

彼はそう言って笑う。

「書けないんだ。やっぱりあれはまぐれだったのかもなあ」

彼の隣で私も笑った。小説家の世界なんて私にはわからない。だから彼が本当に書けなくて悩んでいるのか、冗談で言っているのかさっぱりわからなかった。

「私のことでも書けば？」

「冗談っぽく言ってみる。」

「いいかも」

彼が海を見つめたまま言った。

「君はこの町が嫌いかもしれないけど、俺から見ればこんな素敵なところはないよ。海はきれいだし、魚はうまいし。だからこんな町で育った、幸せな姉妹の話でも書こうかなあ」

本気なのか冗談なのかますますわからなかった。

潤一郎は隣の私を見て、穏やかに微笑む。七つ年上の彼の笑顔を、かわいいなあと思は思う。

足をぶらぶらさせて、彼に寄り添うようにちょっと肩を傾けて、そのままふたりで海を眺めた。

漁から帰ってきた漁船が音を立てて、私たちの前を通り過ぎる。いつもと同じ海の色、潮の香り。だけど潤一郎と一緒に眺めていると何かが違う。もしかしたら彼の言うとおり、ここは素敵なのかなのかもしれないとさえ思えてくる。

十八年間生きてきて、こんな気持ちになったのは初めてだった。

5 手をつないで

潤一郎はこの町でとても目立つ存在だった。

東京からふらりとやってきた、よそ者の若い小説家。目新しいものに飢えているこの町の人々にとって、彼は井戸端会議の話題にもってこいの人物なのだ。

それに彼は昔の文豪を思い浮かばせるような、なかなかいい男だった。漁師のせがれみたいなさげな体は持つていなかったけれど、背が高く細身で、どこか頼りなさげなその体格も、地元の子たちの興味を引いた。

だから私は彼と歩いていると、町中の女の子たちの、嫉妬と羨望の眼差しをひしひしと感じていたのだ。

秋の終わりのその日。町で唯一の、雑貨屋を少し大きくしたようなスーパーで潤一郎と買い物をしていたら、近所のおばさんと同じ学校に通う同級生の女から、ひんやりとした視線を受けた。

「嫌じゃない？ こういうの」

カップラーメンをポイポイとカゴに放り込んでいる潤一郎に私が言う。

「何が？」

「少しでも変わった人がいたり、変わったことをしたりすると、この町ではすぐ有名人になっちゃうの。私は慣れてるからいいけど」

私が言ったら彼は笑った。

「俺も気にしないよ。そんなの」

そして食料品をたくさん詰め込んだカゴをレジに出す。案の定レジのおばさんは潤一郎の顔をじろじろと眺め、その後私を見て、これ見よがしに大きなため息をついた。

そう、私はこの町で、観光客に手を出した女の娘であり、防波堤から飛び降りた不倫女の妹であり、よそ者の若い小説家をすぐにも

のにした手の早い女なのである。

私がぼうつと立ち尽くしていたら、彼は手際よく商品を袋に詰め、私の手を握って笑った。温かくて大きな手。私には「お父さん」というものがいなかったが、もしかしたらお父さんの手というのはこんな感じかな、なんてなんとなく思う。

「行こう」

「うん」

私たちはレジのおばさんの視線を背中に受けながら、ふたり並んで手をつないで店を出た。

外は風が冷たくなっていた。足元の落ち葉が風に舞って、カサカサと音を立てる。寒くて薄暗くて大嫌いな冬が、もう、すぐそこまで来ていた。

「この町が、全部見渡せるような場所に行きたい」

潤一郎が空を見上げながら、独り言のようにつぶやく。私の頭に幼いころの記憶がふつとよみがえる。

「いいけど、けっこう歩くよ。その山を登るの」

私は目の前にある、木の生い茂った小さな山を指差した。

「いいよ。散歩しよう」

彼が言った。私たちはスーパーの袋を揺らしながら、手をつないだままゆっくりと歩いた。

6 コーヒー味のキス

途中の自販機で、潤一郎が温かい缶コーヒーを買った。「凧ちゃんは？」と言うので、私も甘いカフェオレを買ってもらってふたりで飲んだ。冷えた体に温かい飲み物が、じんわりと染み込んでゆく。やがて私たちは、山の中腹にある小さな公園にたどり着いた。公園といってもひと気はなく、寂れたブランコが海風にあおられてキイキイと揺れているだけだ。

「誰もいないね」

潤一郎が少し笑って、寂しげな公園を見回した。

「小さい頃はよく来たんだ。お姉ちゃん」と

ここに来ると嫌でも姉のことを思い出す。

父もなく、仕事や遊びに忙しい母に、私たちはいつも放っておかれた。だから私は姉と一緒にこの公園に来て、日が暮れるまで遊び続けたのだ。

私は潤一郎から手を離し、ブランコに立ち乗りしてみた。ブランコから見ると夕焼け空は、いつもより少しだけ近くに見える。

「どつちが高くこげるか、お姉ちゃんと競争したの。勝つのはいつも私」

潤一郎は黙って歩いて、滑り台の脇から眼下に広がる町を見下ろす。

「今思えば、お姉ちゃんにはわざと負けてくれてたんだと思うけど」

静かな公園にブランコの音と私の声だけが響く。潤一郎は聞いているのかいないのか、背中を向けて立ち止まったままだ。

私はブランコから降りて、そんな彼の隣に並ぶ。そして彼の視線の先を追った。

海に迫り落ちるようなこの山に、密集して張り付いている古びた家々。それがこの町のすべて。なんてちっぴりで、なんて古臭い私の故郷。

潤一郎はそんな私の町をただ黙って見下ろしていた。冷たい風が吹きつけ、彼と私の髪を揺らし、潮の匂いが体の芯までこびりつく。「ねえ」

私が言う。

「潤一郎は、気がすんだらこの町を出て、東京へ帰ってしまうんじゃない？」

「そうだな」

彼は私を見ないで答える。

「ずっとここにいれば？」

私の声が、誰もいない枯れ果てた公園に響く。

「ずっとここにいてよ」

もう一度言ってみた。

潤一郎がずっとこの町にいれば、ずっと私の隣にいれば、私はきつとこの町を出て行かないだろう。そしてこのちっぽけで大嫌いな魚臭い町も、きつと私は好きになれる。

「考えとくよ」

彼は言って、小さく笑った。私はそんな彼の笑顔を見つめる。その笑顔はどこか切くて、今にも消えてしまいそうに儚く見えた。

「潤一郎……」

私はそつと彼の手をとり、その唇にキスをする。

口の中に広がる甘いコーヒーの香り。夕日は海と町を彩り、ふたりの影を長く伸ばす。私はいつかこの場所でした、初めてのキスを思い出した。

相手の男は幼なじみで遊び仲間の、たいして好きでもない男だった。民宿の息子のその男とここで初めてのキスをして、そのあと興味本位でホテルに泊まった。今でも覚えているのは、レモンの味とは程遠い煙草の匂いと、ただ体に残った鈍い痛みだけ……。

私から唇を離して、潤一郎が私を見る。

「軽い女だと思ってる？」

「思っていないよ」

彼は笑った。私は少しだけホツとした。しかし彼はすぐに私から離れ、落ち葉を踏みしめ歩き出した。

「だけでも帰ろう。今日はいい景色を見せてもらった」

私はぼんやりと立ち尽くす。

「女子高生とキスもしちゃったし」

「何それ？ おじさんみたい」

「おじさんだよ、俺は。凧ちゃんから見れば」

私より大人とでも言いたいの？ 潤一郎は振り返ろうともせず、

私に背中を向けたまま歩き続ける。

その時ふと、このまま彼の背中が消えて二度と戻らないような気がして、私はあわてて駆け寄った。そんな私を見て彼が笑う。私はその笑顔を逃さないようにと、思いつきその腕にしがみついていた。

7 最後の電話

冬の海は寂しい。暗くどんよりとした雲が、海と空の境界線をぼかしている。こんな陰気な景色を眺めていると、姉との最後の電話を思い出す。

あれは今日みたいな冬のある日。学校をサボって家でごろごろしていたら、突然電話の音が響いた。

まさか学校の先生じゃないだろうなあ……嫌な予感はしたが、それ以上に何か大事な電話のような気もして、私は受話器を取った。

「あら、凧、いたの？」

それは久しぶりに聞く、姉の声だった。

「お姉ちゃん？ 元気？ 生きてるの？」

住むところも仕事も探さずに、あてもなく出て行った姉のことを、私は内心心配していたのだ。

「やあねえ、生きてるわよお」

「住むところは決まったの？ 仕事は？」

「東京にはどんな仕事だつてあるわよ。その気になればね」

姉はおそらく水商売でもしているのだろうと思った。私と違ってスタイルがよく、美しい顔立ちの姉ならば、そういう方面の仕事ならすぐに見つかると思っていた。

「凧、もしかして私のこと心配してる？」

姉がいたずらっぽい口調で言う。

「別に。ただ、東京の路上で野垂れ死ぬのだけはやめてよね」

私の言葉に姉が笑った。

「大丈夫よ、安心して。私今幸せだから。こっちで彼氏もできたしね。今も彼の部屋にいるのよ。マンションの十五階なの。いい眺めよお、高層ビルばかりだけど」

はしゃいだように話す姉。私は目を閉じて、海の見えない東京の

街を一生懸命想像する。

「いいなあ、お姉ちゃん」

「そう?」

姉はそう言った後、少しトーンを落としてつぶやいた。

「でもね、なぜか無性に海の匂いを嗅ぎたくなる時がある。ヘンね。私言ってることが矛盾してるかしら」

「こんな町でも、やっぱり故郷だからじゃないの?」

「郷愁ってやつね」

私たちはふたりで笑いあった。

それから姉と、どうでもいいようなことを話した。久しぶりだからか彼女はよくしゃべった。だけど私が彼氏のことを聞こうとすると、さりげなく話をそらすのだ。

「ヘンなの。幸せなんですよ? うまくいってるんですよ?」

「まあね。でもだからこそ、あまり話したくないのよ」

「意味わかんない」

「この幸せがいつ壊れるのか……不安なの」

姉がポツリとつぶやく。その声はとても寂しげで、私の胸が痛んだ。

姉は昔からそうだった。幼い頃、父と母によって、幸せが壊れる瞬間を見せ付けられたからだろうか……恋愛するたび、いつか別れが来ることを、彼女は必要以上に不安がった。

高校の時付き合っていた彼氏とも、幸せの絶頂期に姉から別れを告げた。幸せになればなるほど、いつか来る別れに怯えすぎて、耐えられなくなってしまうのだ。当然彼氏も私も、そんな彼女の気持ち理解できなかったが……。

「お姉ちゃん、男と付き合うたび、いつもそんなこと言ってるよね。わざとおどけた口調で言ってみた。すると姉は乾いた笑い声と一緒に、こうつぶやいた。

「そうね……でも今度は本当に彼のこと……」

「好きなんだ?」

姉は答えなかったが、受話器の向こうでうなずいた気がした。

それからすぐに、私は電話のことを忘れてしまった。久しぶりに話した、他愛もない姉妹の会話くらいにしか思っていなかったから、ただどその時すでに、姉は崩れかけていたのかもしれない。

それきり連絡が途絶え、突然見知らぬ女が「私の夫を返して」とうちへ乗り込んできた。その時初めて姉が、ホステスとして働いていた店の常連客だった、かなり年上の男と不倫していたことを知ったのだ。そしてお腹の子供とともに、姉は自らの命を絶った。

死ぬほど好きだったのだろうか、彼女は。その不倫相手のことを……。

「凧ちゃん」

振り向くと、紙袋を抱えた潤一郎が、白い息を吐きながら防波堤の上に立っていた。

「遅いよ。どこ行ってたの？」

彼は笑って私の横に腰掛ける。

「はい」

「わ、おいしそう！」

私は潤一郎から、新聞紙に包まれたホカホカの焼き芋を受け取る。私の隣で彼は「寒い冬はこれに限るね」と言って笑った。

「お姉ちゃんもお芋が好きだったの」

さつき回想しすぎたせいか、私の頭にはまだ姉のことがごびりついていた。

「そう」

潤一郎がつぶやく。その瞬間海からの冷たい風が、私たちの頬に激しく吹きつけた。

「寒い」

マフラーを口元まで巻きつけながら、どさくさにまぎれて潤一郎のジャケットにしがみつく。ふと厚着をした服の下の、彼の素肌に

触れてみたい気になった。

「ねえ、部屋に入れてよ」

そう言って潤一郎の顔を覗き込む。

「え？ 何？」

彼はなんだかうわの空のような表情で振り向いた。

「寒いから、部屋に入れて」

「これ食ったらな」

潤一郎は軽く笑って、そして焼き芋を食べながら、またぼんやりと海を眺めた。

私はそんな彼の横顔を黙って見つめる。彼の吐く白い息とお芋の湯気が、冬の海にどこか哀しく映った。

8 キスをして

潤一郎は私を抱かなかった。

あの夕暮れの公園の後、もう一度部屋でキスをして、なんとなくそういう雰囲気になったこともある。私は彼となら寝てもいいと思っていた。だけど彼はさりげなく私を拒んだ。

私は不満だった。二十五の男が今さら初めてというわけでもなさそうだし、私が初めてではないということも正直に伝えてあった。それなのに……どうして私を抱けないの？ 私は情けない気持ちでいっぱいだった。だから今夜こそは、どうしても彼をその気にしてやりたかった。

部屋に入って、潤一郎にキスをする。唇を重ねながら、いつも私からキスしているなと悲しくなったが、そんな気持ちを振り払うかのように、彼を誘った。

潤一郎の温かな手を握って、私の小さいけれど柔らかいこの胸にのせてみる。心臓の音が彼の手を伝わって、私の手まで響いてくるようだった。

潤一郎はそんな私をじっと見つめる。私は泣きたいほど切なかったけど、めちやくちや大人ぶって彼を見返す。そして少し背伸びをしながら彼の首に手を回して、もう一度キスをした。それが今まで生きてきた私の、精一杯の愛情表現だったのだ。

しかし潤一郎はそんな私を受け入れようとはしなかった。彼はその手で私の肩をつかんでそっと引き離す。

「だめだよ…… 凧ちゃん」

私の中で何かが崩れた。一度崩れたらもうもとは戻れない砂の城のように、私の心は跡形もなく崩れ去った。

「他に好きな人がいるんじゃないの!？」

私は言った。思ってもみない言葉。なぜこんなセリフが自分の口

から出たのか、自分でもわからない。

でももしかしたら心の中で、乾いた砂に水がしみこむように、じわじわとじわじわと、感じていたことだったのかもしれない。

彼は何も言わなかった。言い訳のひとつも言えばいいのに。あなた小説家なんですよ？ 私が納得するような言い訳を作ってみたらどうなのよ？

私が心の中でつぶやく。だけど彼は答えない。私は黙って外へ出た。

外は風が強かった。海からの潮風に体がおおられそうになる。私は髪を押さえながら、薄暗くなった細い坂道を、海に向かって下っていった。

「凧ちゃん」

私の名前を呼ぶ声。もちろんそれは潤一郎だった。

「ごめん」

「ごめんって何？ 私以外に女がいるの？」

「いないよ、そんなもん」

彼がそう言っただけで私の手をとる。私はそれを乱暴に振り払う。そんなつもりはなかったのに。今すぐ彼の、その温かな体に抱きつきたかったのに。

私たちは嵐のような風の中、見つめ合ったまま立ち尽くした。

海は黒いうねりをあげ、白い波を立てている。凧でいるばかりが海ではない。荒れ狂う海も、幼い頃から見慣れてきた。そして男と女に終わりがあることも、姉ほどでもないが感じていた。

「キスしてよ」

私が言う。

「私以外に女がないなら、キスをして」

潤一郎は切ない目で私を見た。そして私の唇に自分の唇をそっと重ねた。

体が熱くて胸が痛い。なぜか、姉の言葉を思い出す。

「無性に海の匂いを嗅ぎたくなる時がある」

私かもしこの町を出ても、そんなことを感じるのだろうか。懐かしい故郷を思い出し、愛する人との別れを予感し、姉のように崩れていってしまうのだろうか……。

そんなことを考えて泣きたくなつた。私は死にたくない。姉のように死にたくない。

「君は誰かのために生まれてきたんだ」

いつかの潤一郎の言葉が頭をかすめる。

「大丈夫だよ」

私にキスをした唇で彼が言った。

「君はお姉さんとは違う」

私はぼんやりと彼を見上げる。彼のまっすぐな視線が、私だけに注がれている。

「風は……美帆子とは違うんだ」

荒れ狂う風の中、潤一郎の口から出た姉の名前は、懐かしく優しく私の胸に響いた。

9 誰よりも、好きだったのに

次の日は冬晴れで、昨日の嵐が嘘のように海は穏やかに凪いでいた。

私は学校をサボって、押入れの奥から一つの段ボール箱を引っ張り出す。これが今この世に残っている、姉の遺品のすべてだ。

家にあつた姉の物は、彼女が死んだ時に全部処分してしまった。全部と言つても、すでに姉はこの家を出ていたから、それはさほど多くはなかつたけれど。

そして遺品の整理が終わつた頃、家に差出人不明の宅配便が届いた。母は「気持ちが悪い」と言つて開けたがらなかったで、私が開けて中を見た。

中には姉が東京に出てから買ったらしい、服やバッグや身の回りのものがほんの少しだけ入っていた。

私はそんな品々を眺めて、姉の東京での生活をほんの少し想像した後、すぐに押入れの奥に突っ込んだ。そして姉の不倫相手だったという男のことを考えた。

姉の葬儀にその男は現れなかった。当たり前といえば当たり前のような気もするし、もしかしたらあの奥さんに、引き止められたのかも知れない。

ただ、最後に話した姉の声を思い出すと、悔しくて哀しくてやるせなくなる。姉は彼を愛していたはずなのに……どうして？ どうしてお姉ちゃんだけが死ななければならぬの？

きつとこの荷物は、その男から送られてきたのだ。男の部屋に入り浸っていた姉の、最後まで使っていた品々なのだ。

数日前まで、私は確かにそう思っていた。

少しかび臭い段ボール箱を開ける。中にはあの時と同じように、

服やバッグが詰められている。

そんなうわべだけの荷物をかきわけ、箱の奥底を覗き込み、見覚えのある一冊の本を見つけた。

何度も何度も読み返されたようなその小説は、確かに私も読んだことのある潤一郎の作品だった。

私はゆっくりとページをめくる。海の見えない東京の街を眺めながら、この本を読んでいた姉の姿が、かすかな痛みとともに胸をよぎった。

「これをうちに送ったの、潤一郎でしょ？」

私はそう言っ、姉の持っていた小説を、潤一郎の前に突きつけた。

今日も彼は防波堤に座っている。姉が身を投げたこの防波堤に……。

「そうだよ」

あっけなく彼は答えた。そして私の手から本を受け取ると、懐かしそうに目を細めてページをめくりだす。

「これは俺が美帆子にあげた本だ」

「あなたの東京のマンションって十五階だった？」

「うん」

「潤一郎はお姉ちゃんと付き合ってたの？」

私の言葉に彼は何も言わず、ただその本をめくり続ける。まるで、愛する人とのラブレターでも読み返すように、大事に大事に……。

海からの風が冷たい。冬の日没は早く、今日も漁船が、立ち尽くす私の前をゆっくりと通り過ぎる。

「あの頃はよかったなあ……」

やがて潤一郎が、昔を懐かしむようにつぶやいた。

「俺の部屋にはいつも彼女がいてさ。小説を書くことに没頭していた変人の俺のことを、彼女は優しい目で見つめてくれていた」

風にあおられながら、彼の繊細な指がただひたすらページをめく

る。

あなたのその指先で、お姉ちゃんの髪を撫でていたの？ あなた
のその手で、お姉ちゃんの体を抱きしめていたの？ 悲しくて情け
なくて泣きたくなる。

だけど彼は続けて言う。今の彼の目には、きっと私のことなんか
映ってないのだろう。

「俺は信じてたんだ。この幸せは永遠に続くって……だから安心し
て本が書けた。それなのに彼女はいつも不安を抱えていて……ろく
でもない妻子持ちの男に引っかけたって、妊娠させられて、結局捨て
られた」

彼の言葉を聞きながら、姉のことを想う。

一番好きな彼との別れを予感して、怯えながら暮らすよりは、好
きでもない男と付き合うほうがいい。普通だったら理解できない理
屈だけど、姉ならきつとそう考える。

姉は潤一郎との幸せから逃げたくて、他の男と浮気した。好きだ
ったのに……本当は誰よりも、潤一郎のことを好きだったのに……。

「バカだよな。それを正直に俺の前で話すんだ。『ごめんなさい、
ごめんなさい』って泣きながらさ」

ページをめくる彼の手が止まる。

「あの時、俺が彼女を許せばよかったのに……」

潤一郎は本を閉じて、私にほんの少し笑いかけた。そして立ち上
がると、ぼんやり立ち尽くす私を残して歩き出す。

日の暮れた青白い空に、星がぼつんと寂しげに光っていた。

10 お姉ちゃんの味

それからしばらく、私は真面目に学校へ通った。昔馴染みの仲間
は次々と就職先や進学先が決まり、なんとなく浮かれていた。

だけど私の進路は決まっていなかった。何度も教師に呼び出しを
受けたが、進学はもちろん就職もしないで、中途半端に毎日を通
していた。

やがて学校が自由登校になり、行くところがなくなった私は、潤
一郎のアパートへと向かった。

最後に潤一郎に会ってから、それほど時間は経っていないのに、
そこはとても懐かしい場所に思えた。

少し緊張しながらドアを叩く。しかし返事はない。思い切つてド
アノブを回したら、鍵はかかっていなかった。

がらんとした彼の部屋。ふらりとやってきてふらりと出て行ける
ように、この部屋にはあまり物が無い。

私は靴を脱いで部屋に上がる。窓際の小さな机に彼の唯一の仕事
道具のノートパソコンが置いてあって、その前に背中を丸めた潤一
郎の姿があった。

「ねえ」

小さく声をかける。彼はただ無心でキーボードを叩いている。

「ねえ、潤一郎」

もう一度呼んだらやっと彼が振り向いた。無精ひげが生えていて
髪もぼさぼさで、なんだか違う人みたいだった。

「ああ、凧ちゃんか……」

潤一郎は一瞬驚いた顔をしたあと、すぐに小さく微笑んだ。私は
そんな彼から目をそらし、締め切った窓を大きく開ける。

「小説書いてるの？」

「うん。そう」

「ずっと書いてるの？ ご飯は食べてるの？」

「いや……たしか三日前に食ったかな？」

信じられない。おそらくろくに眠ってもいないのだろう。目の下のくまが、さわやかで都会的に見えた彼を、やつれた印象にさせる。潤一郎は、机の上にあったコーヒーカップを手に取り口をつけたが、空っぽなこと気づき、すぐもとに戻した。

「コーヒー、いれてあげようか？」

「ありがとう」

私がかんを火にかけると、彼はまた背中を向けた。台所には三日ほど前のお弁当やカップラーメンの残骸が、山積みになっている。変な人……小説家ってみんなこんななの？ これが彼の本当の姿なの？

カップにインスタントコーヒーをいれながら、潤一郎に声をかける。

「ねえ、ご飯作ってあげようか？」

「うん。ありがとう」

彼は私に背中を向けたまま、またそう言った。

私は部屋を出て買い物に出かけた。自分で言うのもなんだけど、私は料理が得意だ。母がろくに家事をしなかったので、幼い頃から私と姉が、台所に立っていたから。

姉は、母が幸せだったころに作っていた、家庭料理の記憶を手繰り寄せながら、完璧なおふくろの味を作り出した。そしてそんな姉の味は私がそのまま受け継いだ。つまり私の料理は、母の料理を再現した姉の受け売りなのだ。

私は普段、そんな家庭的な特技を人に披露するのが照れくさくためつたに人に料理を作ることにはなかった。だけどこの特技はここ一番という時に非常に役に立つ。

男は「おふくろの味」ってやつに、本当に弱い。料理を作ることには私にとって、恋の最終手段だったのだ。

でも潤一郎には、それが逆効果だった。私の作った焼き魚と肉じやがと豆腐の味噌汁を食べて、「美帆子の味だ」と涙をこぼした。私の料理で、姉のことを思い出してしまったのだらう。しかも私の前で泣くなんて……バカな男。そしてバカな私。

食べ終わったら、潤一郎はまたパソコンに向かう。私は流して洗い物をして、畳にぺたんと座って彼の背中を見つめる。

静かな部屋に、キーボードを打つ機械的な音と、かすかな波の音が響く。薄暗い蛍光灯の明かり、ストーブの暖かさ。

潤一郎は私に帰れとも泊まっていけとも言わなかった。もう私のことなんてどうでもいいのかもしれない。

私は毛布を頭からかぶって、ずっと彼の背中を眺め続けた。ずっと、ずっと……。

夜中にストーブの灯油が切れて、買い置きもなかったので、一気に部屋が冷え込んだ。私は寒さに震えながら布団の中にもぐりこんだけれど、彼はそれさえも感じないのか、ただ夢中で青白く光る画面を目で追っていた。

朝、寒さで目が覚めたら隣に潤一郎が眠っていた。やっぱり彼も寒かったのか背中を丸めて、私に寄り添うように寝ていた。

潤一郎は私が、付き合っていた彼女の妹だと知りながら近づいた。最初からすべてわかっていたのだ。あの防波堤で、私が恋に落ちたあの瞬間から……。

私は憎しみをこめて彼の寝顔を見つめる。だけど、その無防備で子供のような寝顔を見ていたら、憎しみよりも愛しさがこみ上げてきてしまって、私はなんて甘いんだろうと情けなくなった。

そう、私は、姉のことを今でも愛しているこの男を、好きになりはじめていたのだ。

それからずっと私は、潤一郎の部屋にいた。

彼は私がいなくてもいなくても関係ないようだったし、家を何日留守にしても、私を探し回るような母親ではないことも知っていた。

まあ、私が彼の部屋に入り浸っていることは、母はおるか近所のおばさんにだって知れ渡っていることだろうけど……。

潤一郎はただひたすら小説を書き続け、私は家政婦のように食事をを作る。私の作ったご飯を食べている時だけ、彼は人間らしい表情をした。

最初泣きながら食べていた彼も、いつの間にか私の料理を食べて「おいしい」と笑った。だけど食べ終わるとすぐにまた、私に背中を向けてしまうのだ。

そんな生活が一ヶ月近く続いたある夜、食器を洗っていると、誰かが部屋のドアを叩いた。

もちろん潤一郎は出る気がない。私も無視しようとしていたが、ドアは次第に激しく叩かれ、何やら女の叫び声が聞こえてきた。これはただ事じゃない、私はあわててドアを開く。

ドアの前には一人の女が立っていた。どこかで見た顔。だけどここの町の人間ではない。やつれたような顔つきのその女は、一瞬私を見て驚いた表情をしたが、すぐに私を押しつけ土足で部屋に上がった。

「何なんですか!？」

私は叫びながら、その女の香水の香りを嗅ぐ。そしてやっと思い出した。この女が「夫を返して」と、私の家に怒鳴り込んできたあの日のことを。

女はまっすぐ潤一郎の座っている脇までやってきて、手に持っていた何通もの手紙を叩きつけて怒鳴った。

「あんだでしょう!? こんなものをうちの主人に送りつけてきた男は!」

分厚い手紙がキーボードを叩く潤一郎の手に当たって、彼はやつと顔を上げた。

「どういうつもりなの!? あの女にあんな死に方されてシヨックを受けてる主人に、こんな手紙を二年間も送り続けて……」

女の唇は青ざめて、握りしめた手が震えている。

「主人は死んだのよ! ノイローゼになって自殺したのよ!」

静かな部屋に女の叫ぶような声が響く。すると、わけのわからないまま、ぼんやり見ていた私の前で、潤一郎がこう言った。

「死んだんですか……あの人」

彼の口元がほんの少し微笑んだのを、私は見逃さなかった。

「あんたが殺したんじゃないの!」

女はこの世の終わりのような声を出して、思いきり潤一郎の頬を殴った。そして大声で泣き出し、畳の上につづくまる。

「私や子供たちはどうすればいいのよ……あの人に死なれて……あの人をどこまで苦しめれば気がすむのよ……」

「苦しんだって?」

泣きじゃくる女を見下ろすようにして彼が言う。

「あんな男の苦しみなんで、美帆子の苦しみに比べたら……」

私は黙って彼を見つめる。そして彼の死んだような瞳に気づいて、初めてこの男のことを怖いと思った。

潤一郎は復讐をしたのだ。姉と関係を持ちながら、子供ができたとわかったとたん、簡単に切り捨てた、情けない妻子持ちの男に……

「訴えてやるわ」

女が顔を上げて、散らばっている手紙を握りしめ、潤一郎をにらむ。

「どうぞ自由に。でも、その手紙に差出人の名前はないんでしょ? 俺が書いたってという証拠でもあるんですか?」

潤一郎はかすかに笑って、落ちている封筒から中身を出した。

「それにこれはただの手紙ですよ。脅迫状でもなんでもない。それをあなたのご主人が、どう受け止めたのかは知りませんがね」

女が震えながら、握りしめていた手紙を彼の顔に叩きつけた。そして「人殺し！」とドラマみたいな捨て台詞を残して、部屋を出て行った。

部屋の中は、また静かな気配に包まれた。潤一郎は何事もなかったように背中を向けて、小説の続きを書き始めた。

私は畳に散らばっている手紙をかき集める。最近投函された何通かの消印は、この町のものだった。

夫が死んだ後、妻は消印からこの町を割り出し、たぶん探偵でも雇って姉の交友関係を調べ、そして潤一郎のことを突き止めたのだらう。

そんなことを考えながら、一通ずつ中身を取り出した。かさかさとした乾いた紙の音が響いても、潤一郎は私を止めようとはしない。

丁寧な手書き文字で書かれた、その手紙を読んできた。それは確かにただの手紙であり、つなげて読むと一つの小説のようでもあった。

そこには誰かを責めるような言葉も、脅迫するような言葉も、何ひとつない。しかしそれを読み終わると、私は何とも言えない後味の悪い気持ちに包まれた。

「お姉ちゃん……ごめんね……」

なぜか私の心は、決して後戻りのできない深い後悔の想いで、押し潰されそうになっていた。それは自殺した姉を止められなかったという、私の胸の片隅に、いつまでも引っかかっている虚しい気持ち。

現にこれを読み続けた姉の不倫相手は自殺をした。少しずつ少しずつ、姉を捨てた、姉を自殺に追い込んだ、後悔の念を溜め込んで……そして耐え切れずにその男は死んだのだ。

私は潤一郎に断りもせず、手紙をゴミ袋に押し込んで、布団の中にもぐりこんだ。

怖かった。怖くて怖くて、体の震えが止まらなかった。

静かで冷たい空気の部屋に、もう聞きなれたキーボードの音が響く。

波の音が聞きたい。思いきり潮の匂いを吸い込んで、海風をこの体中に受け止めたい。

私は生まれて初めてそんなことを思いながらも、この部屋を出て行くこともできずに、ただ布団の中で強引に目を閉じた。

12 涙の朝

次の朝目が覚めたら、部屋は妙に静かで、そこに潤一郎の姿はなかった。私はあわててコートをはおり外へ飛び出す。朝日に輝く見慣れた海が、今朝はとても懐かしく思える。

潤一郎を見つけるのは簡単だった。彼はいつもの防波堤に立ち尽くして、ぼんやりと海を見つめていた。

「潤一郎！」

息を切らして駆け寄る私に、彼が振り返ってこう言った。

「小説、完成したよ」

真っ白い息を吐きながら潤一郎を見上げる。朝日の中で、彼はすがすがしい顔をして立っている。私の頭に昨日の、「人殺し」という言葉がぐるぐると回った。

「潤一郎はおかしいよ。どうしてあんな手紙を、あの不倫相手に送り続けたの？」

彼は黙って私から目をそらす。青い空の彼方に、真っ白なかもめが一羽、すつと飛んでいった。

「あの手紙は……」

彼がつぶやく。

「俺に宛てて書いた手紙なんだ」

私はぼんやりと彼の横顔を見つめる。彼は輝く海を見て、眩しそうに目を細める。

「最期まで、彼女の本当の気持ちに気づいてやれなかった、彼女の死を止められなかった、情けない自分に宛てての……」

私の胸に、潤一郎のかすれる声が響く。

「俺が……美帆子を殺してしまった……」

私は目を閉じ、一瞬姉の笑顔を思い出した後、大きく首を横に振った。

「違う！ お姉ちゃんが死んだのは、誰のせいでもないよ？ ただ

お姉ちゃんが弱かっただけなの！ いつだって未来を悲観的にしか見れなくて……お姉ちゃんは目の前にいたあなたのことだって、全然見ていなかったじゃない！」

私はそう言いながら涙をこぼした。幼い頃からずっと一緒だった、大好きなたった一人の姉。その彼女のことを悪くは言いたくなかった。だけどそれは悲しい事実で、今その事実を彼に伝えられるのはこの私しかないのだ。

私は泣いた。子供のように泣きじゃくった。防波堤に当たって砕けた波の音が、私の耳に遠く響く。

「凧ちゃん……」

潤一郎の温かな手が私の頬に触れる。私は気が遠くなりそうな気持ちに襲われながら、やっとの思いでつぶやいた。

「何しに来たの？」

私の声が涙で震えている。

「あなたは何しに、この町にやって来たの？」

「お姉さんの生まれた町を見るために」

私を見下ろす彼が答える。

「彼女はこの町を嫌っていたけど、でもいつも心のどこかで恋しがっていた。この海の音も、潮の匂いも、風の心地よさも、本当は何より素敵なものだって思っていたはずなんだ」

私は顔を上げて潤一郎を見つめた。頬に伝わる涙を、彼が指先でそっとぬぐう。

「じゃあどうして私に近づいたの？ 初めから知ってたんでしょ？」

私が彼女の妹だって……」

「知ってたよ」

彼が言った。

「君のことは何でも知ってた。美帆子はいつも君のことを話していたから。田舎に一人ぼっちで残ってきてしまった、大好きな妹のことを」

私の目からまた涙があふれる。こんなに泣いたのは、姉の葬儀以

来だろう。

「だから俺は会って見たかったんだ。彼女は君の話をしている時だけ、今を生きていたから」

「私が……」

潮風にあおられながらつぶやいた。

「私だけが、お姉ちゃんの現実だった……」

「そう」

彼が言う。

「君が生きていることだけが、いつも不安な未来しか見ていなかった、悲しい彼女の現実だったんだよ」

私はもう一度、目を閉じた。今度はさっきよりもさらにはっきり、姉の顔が浮かぶ。そんな私の手のひらに、潤一郎が何か小さなものを握らせた。

「完成した小説。この中に入ってる」

私は目を開け、手のひらの中のUSBメモリを見つめる。

「君にあげるよ」

「私読めない。パソコン持ってないもの」

「だったら俺のパソコンもあげる」

彼がそう言っただけで笑った。久しぶりに見る、彼の笑顔だった。

「今度、取りにおいで……」

朝日を浴びる防波堤の上を、潤一郎がそう言い残して去ってゆく。私は黙ってそんな彼の背中を見送る。

今すぐ駆け寄って、その腕にしがみつきたかったけど、私はそれをしなかった。ただ手のひらの中のUSBを見つめ、大切な宝物のようにそっと胸に抱きしめた。

13 ラブレター

次の日は卒業式だった。

涙をこぼして別れを惜しんでいる、制服姿の友人たち。

だけど私は泣かなかった。涙は昨日の朝にすべて流し尽くした。

そんな気がしたから。

卒業式が終わると、私はまっすぐ潤一郎の部屋へ向かった。

住み慣れた貸家の前を通り過ぎ、古臭い民宿脇の坂道を駆け上る。後ろを振り返ると、眼下に青い海が広がり、風はいつしか優しい春風に変わっていた。

私は彼の部屋のドアを叩く。返事はない。いつものようにドアノブを回して中を覗くと、そこにはいつもよりさらに、がらんとした空間が広がっていた。

潤一郎は出て行った。愛していた彼女の生まれ故郷の町を眺めて、そして私に黙って去って行った。

不思議と私は驚かなかった。こうなることはずっと前からわかっていたような気がする。私は部屋の窓を開け、見慣れた海を見下ろした。

海はどこまでも広く凧いでいる。青い空が遠い水平線の彼方で、海と交わってかすんでいる。

潤一郎はどこへ行ったのだろうか。住み慣れた東京に帰って、また小説を書き続けるのだろうか。それともこの海に身を投げ出して、深く暗い海の底で、愛しい彼女と出会うのだろうか。

知らない。そんなことは。もうどうでもいい。

私は窓の下に置き去りになっているパソコンを手で撫でた。ポケットの中には潤一郎からもらったUSBメモリが、私の体温によって温められている。

パソコンを抱えて部屋を出た。もうこの部屋に訪れることは二度とないだろう。

私は振り返らずにアパートの階段を降り、十八年間生まれ育った我が家に帰っていった。

やがてこの町に穏やかな春がやってくる。結局私はこの町を出ることなく、母が昔働いていた、いわくつきの民宿で手伝いをしていった。

朝、お客を送り出して部屋の掃除が終わると、私は休憩時間をもらって防波堤で弁当を広げた。

日差しは暖かく、波は静かに揺らいている。優しい潮風が、私の栗色の髪を揺らす。

この休憩時間が終わったら、またあわただしい厨房に戻って、料理の仕込みを手伝わなければならない。

私は弁当を食べながらぼんやりと海を眺めた。姉の飛び降りたこの場所で、こんなことをしている自分がなんだか不思議だった。

潤一郎が出て行ったあの日から、この海で水死体が上がったという噂は聞いていない。だから彼はとりあえず生きているのだろう。たぶん、姉との思い出が詰まった東京の街で。

私は潤一郎からもらったあの小説のことを思い出す。最初読んだ時、私にはさっぱり意味がわからなかった。難しい言い回しが多すぎるし、ストレートに自分の気持ちを表現していないその文章は、何が言いたいのか私には理解できなかった。

だけど読み終わった後、少なくともあの手紙のような後味の悪い印象は受けなかった。それは、彼の処女作のあの甘い読後感とも違う、やりきれないほど切ないのになぜか心に染み入る、そんな感じ。私はもう一度読み返した。潤一郎のことを考えながら。その文章

の裏の裏を読むように試行錯誤しながら。そうしたらなんとなく私にはわかった。

そして三回目に読み終わった時、ついに私は確信した。これは潤一郎から私に宛てた、ラブレターなのだ。

遙か遠い東京の街で、会う前から知っていた、愛する彼女の妹。その妹に出会ってみて、彼は昔からの知り合いのような懐かしい想いを私に抱く。そしてその想いはゆっくりと彼の中で変化してゆき、最後に彼は私のことを、一人の女として感じるようになっていたのだ。

私はポケットの中に押し込んである、彼からもらったUSBメモリを握りしめる。いつでもどこでもこのラブレターを、私はこの体から切り離すことはない。

そして私は海に誓う。いつか必ずこの町を出て、私は彼を探しに行く。私の足で歩き回って、私の目で見つけ出し、私の腕で彼を抱きしめる。

大丈夫、絶対に。この世界のどこにいたって、私は必ず彼を見つける。だって私は彼にとつての現実で、そして私は彼のために、この世に生まれてきたのだから。

春の少しおぼろげな空を、海鳥が気持ち良さそうに飛んでいる。

そろそろ宿に戻らなければ。私は弁当を片付けて立ち上がった。

海沿いの道を、潮風に打たれながら歩く。

漁船から降りた漁師たちが、道端に網を広げて干している。民宿の物干場では、真っ白なシャツが風に揺られ、買い物帰りのおばさんたちは、いつもの場所でいつものように立ち話をしている。

そんな見慣れた風景の端から、ランドセルを背負った幼い姉妹が、笑いあいながら歩いてきた。私は立ち止まってふたりを見送り、幼い頃の自分と姉の姿を重ね合わせる。そして小さく微笑むと、また

前を見つめて歩きはじめた。

13 ラブレター（後書き）

最後までお付き合いいただき、どうもありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9867o/>

ラブレター

2010年12月10日09時40分発行